季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉
通巻32号
冬号
2008-9
12,1,2月

シリーズ 上越（かみえちご）後のかたち「上越学」への試み

「地域力の源」を考える 歴史に学び 明日（あした）の鏡とする

巻頭エッセイ◉このまちのこと

このまちも捨てたもんじゃない

大河ドラマ

天地人を歩く

【文学の旅】

越後府中の饗宴

為広越後下向日記

冷泉為広卿 京兆 細川政元

季刊 直江の津 第32号 冬号
2008・09―12・1・2

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
　このまちも捨てたもんじゃない　前角隆夫　3

■シリーズ上越後のかたち
　対談
　［地域力の源］を考える
　　歴史に学び明日の鏡とする　4

■文学の旅
　令泉為広卿　京兆　細川政元
　　越後府中の饗宴　20

■天地人を歩く　17

■カメラの眼　25

■読書びと
　図書館のある暮らし　竹内紀吉著　24

■建物さんぽ　26

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート
　長野新幹線佐久平駅と佐久市に学ぶ　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



11月24日、信越線関山・長野間開通120年を祝ってD51が客車を引いて、長野・黒姫間を走った。

♣巻頭エッセイ
前角隆夫(まえずみたかお)さんのこと
1968年　高田市に生まれる
大学時代を金沢周辺で過ごし、その後転勤族として東北各地を転々としながら見聞を広め上越に戻る。
趣味は、元気のあるまちめぐり
好きな言葉は、体験に勝るものはないという前向きの人である。

このまちも捨てたもんじゃない

前角隆夫

一年間にどのくらいの人がこのまちを出て、そして戻っているのだろうか。

私は十八歳の春、多くの人と同じように進学でこのまちを出た。そして、十二年後に転職という形でこのまちに戻ってきた。出戻り、Uターンとかいろいろな言葉があるが、家や仕事の事情、人間関係など理由はどうであれ、縁あって再び戻ってくる人が、周りには意外に多いことをその後の生活で知ることになった。

今までの人生の四分の一近くを外で過ごしたなかで、自分にとって、故郷とは生まれただけの場所でしかないのかという難題を突き付けられたことがあった。

私は名前が珍しいので、初対面でまず正確に呼ばれたことはない。次に「出身地」である。生れも育ちも上越だから、そう答えると、「どんなところ」と返ってくる。すると、私は答えに窮してしまうのである。位置や風土を説明するだけで、見所（みどころ）などまるで〈のっぺらぼうの顔〉を説明しているようであった。心のどこかに何も自慢できるものがないという漠然としたイメージがあったのかもしれない。金沢や京都、高岡などの友人は、雄弁にまちの魅力を聞かせてくれる。それも楽しそうに〈わがまちが一番〉と言わんばかりに。

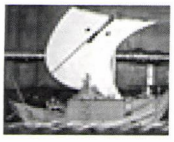
十二年後、戻ってきた私に仕事の中で転機が訪れ、まちを元気にしようという人達と出会うことができた。

その人達は難しいことはしていない。無い物ねだりはしない。ただただこのまちを愛し、今あるものを磨き上げ、〈どこのまちとも一緒ではないのだ〉と言っているように思えた。

評論するばかりで活動をしようとする人がいないのでは、と思っていただけに、知り合えたことはうれしかった。

一人一人がもっとまちを愛し、自信を持ってこのまちを育てていこうと、がんばっている人がいる限り、このまちはまだまだ捨てたもんじゃない。

このまちが、このまちらしくなっていくとき、将来きっと、子どもたちが雄弁に〈わがまち〉を語ってくれるようになることだろう。



シリーズ
上越後（かみえちご）のかたち
「上越学」への試み

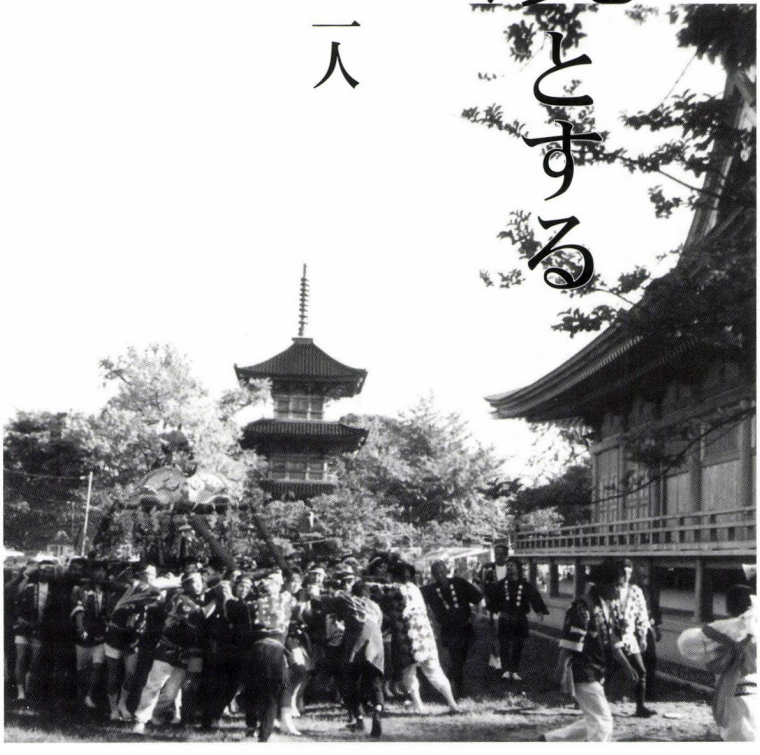
対談

「地域力の源」を考える
歴史に学び明日（あした）の鏡とする

突然の出会いから20年
異分野から同じ歴史を見据える二人
渾身の対談

川村知行
小島幸雄
聞き手　北越出版

三方を穏やかな山並みに囲まれ、北に海を望む頸城の地は、どの分野の歴史を掘り起こしても、山海の豊かな恵みに与（あずか）り、交通の要路であり、越後の国の都に相応しい地であったという思いを深くせざるを得ません。しかし、この「頸城（久比岐）」には「なぜ」あるいは「謎」が多すぎます。その「なぜ」「謎」に迫り、明らかにしていくことこそが、わが上越の未来への展望を切り拓く「学」ではないかと思います。



神仏習合の五智のお祭り

雪に埋もれた高田のまち



「シリーズ　上越後のかたち」は、越後国府の所在地の謎から出発し、各方面の上越後を掘り起しつつ「上越学」を試みようと始めましたが、今回の冬号で休刊が決まり、本来、シリーズの最後に、お二人に対談をお願いする予定でしたが、急きょお願いすることになりました。

お二人は、ご専門が仏教美術史と考古学という異分野の視点から、まさに「上越後のかたち」を長年にわたって見つづけてこられました。今日は、そのお二人に「上越後のかたち」と、そこから見える「地域力」の源をさぐっていただきます。

「地生え」ではない。ということ

――お二人とも上越市の地*生えの人ではありません。小島さんは能生の出身ですね。

小島　二十四歳のとき、昭和五十二年に上越へ来たんですが、それまでに直江津へ一度、高田にはジャンプを見に来たのと修学旅行で。大学の時には春日山へ来ました。生まれは能生だけど、ほとんど知らない土地と言ってよいと思います。直江津駅は乗換えで知っていましたが。

上越へ来たのは、上越教育大学の建設に先立って敷地の発掘調査をすることになって、私はちょうど富山市役所にいましたので、「来ないか」ということで。

合併して間もない頃で、高田だから、直江津だからというような時期でした。

当初は、それこそ四六時中発掘をしていて、行く場所と言えば市役所と発掘現場。それと仲町とか直江津の駅前くらい……。（笑い）

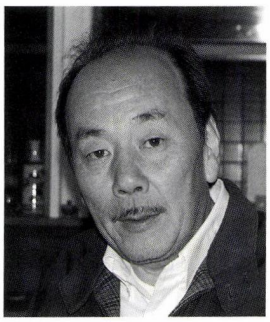
しばらくして落ち着いた頃から、地図を見て町を歩くことから始めました。寺町ってどんな所なんだろうと、車など持っていませんから自転車を買って、走り回った記憶がありますね。当時二千円の中古の自転車。

――川村先生は、当然大学が出来てからですから何年になりますか。

川村　昭和六十年の四月です。昭和六十年から六十一年の大雪を体験して、これはとても人間の住む所ではないと思った。（笑い）

雪もまあそれっきりで、耐えることが出来たので、以来二十三年ほどになります。最近では「どっちの生まれですか、直江津ですか高田ですか」って聞かれるので、めんどうくさいので「川の向う」と言っています。（笑い）

――それこそ川の向うに生まれたみたいに、お二人とも土地の人よりも土地の人らしい。土地勘もあります。



小島幸雄さん　旧能生町出身
新潟県文化財調査指導委員
元上越市学芸員
専門・考古学
川村知行編「地域から考える総合学習」　中世の山城に学ぶを執筆



炎上する五智国分寺

川村　職業柄、どこへ調査に行っても先ずその土地をつかむところから始めますから。

来たときは何も知りませんでした。高田は松平のお城で、春日山には上杉謙信さんがいたっていうことくらいで……。これはびっくりしたことですが、奈良時代の国分寺があるということです。

ですから、最初の三年間は地元のいろんな人から話を聞きました。納得する話ばかりではなく、そんな馬鹿なという話もたくさん聞きました。四年目からは、これはやっぱりこうじゃないかなと、むしろ地元の人たちにもお教えするような立場になってしまいました。

突然の出会い。五智国分寺との出会い。

――川村先生の研究分野から見ると。

川村　東大寺から始めて、平安、鎌倉時代、それから醍醐寺の研究ですから、フィールドは奈良や京都です。しかし実際に訪ねて歩いてみると、上越には縄文時代からあり、古墳時代から奈良、平安時代の時代時代の遺跡、仏像や絵画もそれぞれの時代、それが明治、大正、昭和までずっと残っていることに気づきました、これは「典型的な地方の文化都市」だっていうことが理解できました。

――その頃、今から二十年前、全く面識のなかった二人が劇的な出会いを迎える。

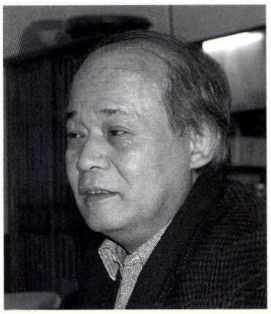
川村　そうですね、昭和六十三年の一月十六日でしたね。国分寺の本堂が火災に遭った夜です。後で小島さんだと知りました。

小島　私も全く分りませんでした。後で知ったことですが、並んで立っている二人を捜査課が不審人物と見て写真を撮ったらしい……。（笑い）

川村　各地の国分寺の場所は見聞きしていましたので、最初から越後の国分寺は五智国分寺ではない。何処にあるのか、とりあえず五智の国分寺を調べていかなくてはいけないなと思った矢先の火災だったのです。焼ける前にちょっとでも調べておけばと、とても後悔しました。

小島　昭和四十八年に出た『新井市史』に、加藤晋平先生が「越後国分寺は上越市三郷地区の可能性が高い」と書いている。卒論を書いていたときで、よく覚えています。「五智の国分寺ではないよ」ということですから、それが頭にあったのと、自分もそういう時代に興味をもっていたので、今にして思えば、それが先生との出会いになったわけですが、やはり火災は不幸な出来事です……。

川村　その直後、上越市の文化財調査審議委員にという依頼があって、国分寺のこともあ



川村知行さん
東京都出身
上越教育大学教授
専門・仏教美術史
「地域から考える総合学習」
編者

＊京都相国寺の詩僧万里集九の詩文集「梅花無尽蔵」に、越後の国分寺は「堂宇は山の如く海涯に冠たり」と記している
＊上越教育大学は地域の人たちのための公開講座を多数開いている



大日如来坐像

岩殿山　五智国分寺奥の院



り、本当に調べなくてはいけないと思った矢先でしたので、引き受けさせて頂き、以来二十年になります。

小島　そうですね。

川村　あれがなかったら、素通りしてしまったかもしれないですね。

五智国分寺の謎と上越後の風景

――ここらあたりから、川村先生の大学で開かれている仏教美術の公開講座が、越後国府の謎に迫る時期になるわけですね。小島さんは最初から参加していた……。

小島　文化財調査審議会に入っていただくお願いがきっかけで、第一回から…。

今はだいぶ変わりましたが、考古学は、まだ十一、十二世紀が非常に分りづらい時期でしたから、講座の中で、仏像があるわけだから同じ時代の遺跡もあるだろうというのが見えてくる。

川村　小島さんと出会い、考古学と私がやっている美術史、文献で考えるのではなく〈もので考えたら越後はどう見えてくるか〉ということがとても新鮮に思えて、「越後国分寺の謎」から「越の文化を探る」という講座になっていったわけです。

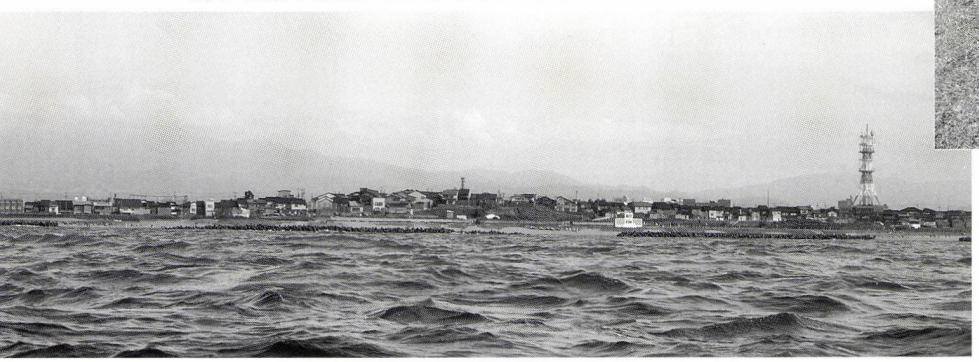
第一回の巡検は、越後で奈良時代のものを探すのはなかなか難しいから、一番近くて一番典型的に残っている佐渡国と佐渡国分寺から越後を考えようということで佐渡を巡りました。次は隣りの信濃国分寺。西は若狭の国分寺から丹後まで、東は会津・米沢・多賀城・

――万里集九の「海涯に冠たり」によって、海没説がずっと支持されてきたなかで、国分寺は、ある時期から郷津の岩殿山にあったということがほぼ定説になりつつある。それもお二人の出会いがなかったら……。

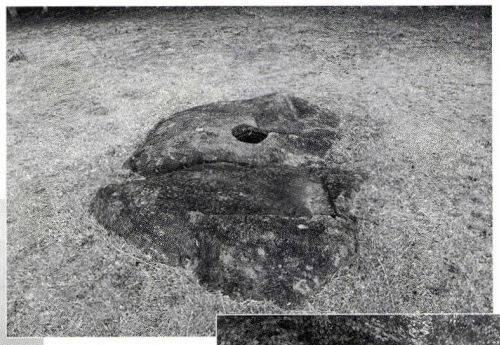
川村　誰も注目していなかったと思うのですが、岩殿山の大日如来を見た時、これは都の仏師によって地方で作られた真言宗系の十二世紀を代表する仏像である。こんな良いものが上越にはあったのかと、正直言ってびっくりしました。

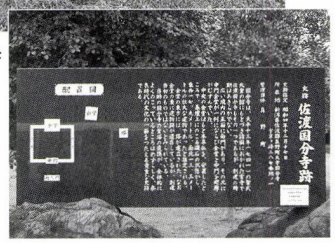
ちょうど醍醐寺を研究していた頃で、醍醐寺を調べていくと、越後国分寺との関わりが明らかになってきました。

詳しいことは省略しますが、奈良時代の国分寺と、鎌倉から室町時代にかけて真言宗寺院の世界がある。その後に、上杉謙信が真言宗で再興した五智国分寺が展開し、その真言宗の国分寺は会津から米沢へと移動し、江戸時代になって、五智国分寺は天台宗で、もう一度再興されて今に至ったということを見通すことが出来たのです。



海から見る砂丘の上の直江津のまち





佐渡国分寺
搭心礎

平泉まで踏破したことになりますね。

――外から内を見るという視点ですね。

川村　越後の国分寺の問題は、一新潟県の問題ではなく全国レベルの問題で、越後の国のことだけを考えていたら解決はつかないという確信は最初からありました。

小島　ないものねだりではなく、外から見て、この土地にも有ったものを探し出さなければいけない。それを探す方法は、ここだけを見ていたら絶対出来ない、外へ出て行って、もう一度自分のところへ帰ってくる。

物だけを見に行くのではなく、全体の景観を見て来る。たとえば何らかの条件があって、そこに国分寺が造られている。お城も造られている。という見方が必要だと思いますね。

――数多く見てくると、行った先々の景観に、共通点を見出すことができるということでしょうか。

小島　そうですね。ただ国分寺として存在するわけではなく、妙高も米山もありというなかで存在しているのだと思います。平泉など典型的で、山がなければ平泉は存在しない。そういうものを見てきて、自分の土地へもう一回戻って考える。

川村　他人の家のことは、わりに気がつくし、面白おかしくも語られる。自分の家のことは余り語りたくない。だから自分の家のことは気がつかない。そこは、私たち二人共よそ者だったから、この土地を柔軟に見られたのかもしれませんね。

小島　そうかもしれません。それと専門としている分野が違ったことが、非常に新鮮でした。

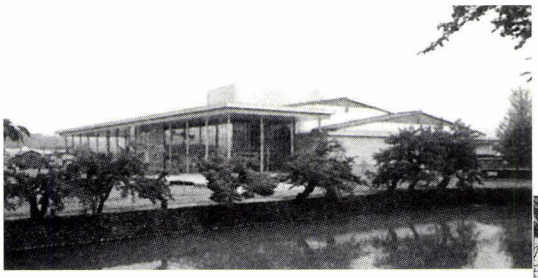
――繰り返すようですが、単なる歴史を探るのではなく、この土地、上越という土地のありようが見えてくる。

川村　最初から私たちは地方の物だとか、〈地方のものは二級〉だということは何も考えていない。むしろ越後のものは一級品だと最初から考えていた。

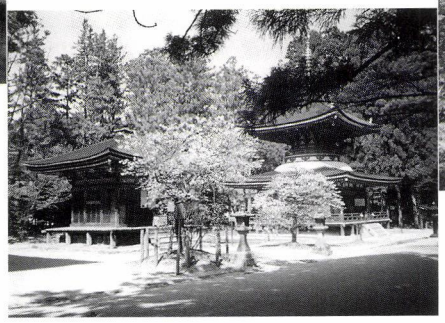
小島　特に頸城は。

川村　こんなにいいものが最初から越後にあったわけではない。どこからからやって来たのかもしれません。越後の文化、頸城の文化というものが、どこから、どういうクラスの人たちがやって来て文化を培ってきたのかという問題、どういうルートでやって来たのということが明らかになり、例えば今これしか残っていないが、当時はこれくらいの規模だったろう。残っていないのは、その後、歴史の展開があって、あるものは作られ、あるものは失われっていった。その繰り返しで今日に至っている。今日の我々も古いものは壊すし、新しいものを作ることもある。そういう過程――この地域の文化の特徴――を一番よく読み取ることができるのではないか。

小島　どうしても日本海側、北陸の流れの中で見られがちですが、そういう短絡的な北陸の日本海側の一都市としての見方ではないと思っています。東山道にも見に行きましたが、



越後上杉家のタイムカプセル　上杉博物館



高野山



上杉謙信廟所
高野山奥の院への参道にある

向うからの文化を受け、逆に向こうへの日本海の窓口として、どのように物を上げていったか、そういう観点が、今まで欠けていたのだと思います。

――誤解を省みずに言えば、「謙信公は偉い、だから、この土地はいい土地だ」という、いわゆる郷土史の見方があった。

川村　それは大事なことで、その蓄積があったから他の地域と比較することができたので、郷土史研究とは全く矛盾していない。私は東京で生まれ育って、奈良や京都に通っていて、日本の文化がほとんど分かると錯覚していた。ところが、むしろ東京や京都や奈良が例外で、日本中の各地方に中央の文化が伝播しながら、その地域の文化を形成していくのが見えてくるわけです。新潟県に来たおかげで、知らなかった残りの半分があることを知ってしまった…。

上杉謙信、春日山城のこと

――それがなぜ国府・国分寺から春日山へ行ってしまったのでしょうか。

川村　戦国の合戦など興味がなかった私が春日山のことを考えるようになったのは、越後の国分寺の流れが一つのきっかけです。

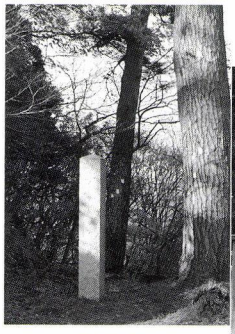
上杉謙信が永禄五年（一五六二）に国分寺を真言宗として〈再興〉しました。謙信公は林泉寺で修業しているので、一般的には禅宗の坊さんだと思われています。ところが落慶法要に高野山の無量光院清胤という坊さんを導師として招いている。どうして真言宗の聖地高野山から越後までやってくるのか最大の不思議でした。

ところが謙信公は上洛のたびに高野山へ登っている。当時、高野山に行くということは、後のお伊勢まいりのような時代ではありません。例えば平安時代や鎌倉時代に白川、鳥羽、後白河、後鳥羽院が毎年のように熊野へ参詣しているのとどこか共通するものがあるのではないかと思っていました。

そして、謙信公や父親の長尾為景の時代には、むしろ一向宗を弾圧していた。いつから浄土真宗になったかといえば、上杉が会津から米沢に移って、空っぽになったときに信濃あるいは越中から一気に入り、江戸時代の初めには真宗王国になったことが分かります。

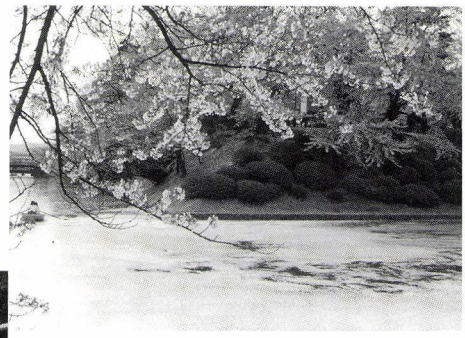
それが分かると、あちこちに真言宗の遺物が次々と見つかってきます。そうすると中世と近世の越後は精神的にも文化的にも全く違う世界であることに気づきます。

もう一つは上杉の財産です。いま米沢にあって国宝ばかりです。あれはいったいどこにあったのか、春日山にあったのです。そっ


不識院


謙信公御廟


上杉家廟所
謙信公の廟を中心に左右に
歴代藩主の廟が並ぶ


内濠をはさんだ対岸がかつての謙信公の御堂

くりそのまま米沢に移動してタイムカプセルのように残っている。

今度は上杉の時代のことを調べるために米沢を訪ねてみると、平安時代の両界曼荼羅がある。平安時代の毘沙門天の画像、善光寺如来、泥足毘沙門天もある。みんな春日山にあった。謙信公の日ごろの行いは毎日のように陀羅尼を唱え、真言を唱え、高野山で阿闍梨の修行をする。これは真言宗の僧侶となんら変わりはないことに気づきます。

そして最大の謎が解けてきました。謙信公は亡くなった後、「右の御手に御剣、左の御手に法華経」を持ち、甕の中に入れて塩漬けにされます。米沢では明治まで、今の上杉廟ではなく米沢城の本丸の御堂（みどう）にずっと祀っていました。もっとびっくりすることは、内濠をはさんで二の丸に真言宗の寺だけが十一ヵ寺、さらに僧だけがいる寺が十、合わせて二十一ヵ寺の真言宗の寺がある。

――二の丸というと上杉博物館のあたりですね。

小島　発掘したらお寺の跡が出ましたね。

川村　その真言宗の寺はどこにあったのか。なんと越後、信濃に真言宗の寺があって米沢へ移動したことも見つけました。その中の幾つかの寺が春日山にあって、朝な夕なに謙信公の、いわば生きた甕に御斎を差し上げる。

――弘法大師と変わらないですね。

川村　これは米沢で始まったのではなく、春日山でやっていたことですね。たまたま東大寺や醍醐寺の研究をしていたので、私は謙信公と同じ足跡を踏んでいたのです。それは春日山の近くに住んだからこそ気がついたことで、この地域の人たちは、ほとんど浄土真宗ですから、基本的にそこで考えていますから、実感として真言宗を理解するのは難しいことかもしれません。また、すぐそばにあることで、なかなか気づかなかったということもあるでしょうね。

小島　今のようなお話を、はっきり発言されたのは、平成年十年の上教大二十周年の「春日山シンポジウム」でしたね。あれ以来、春日山の見方がどんどん変わっていくわけです。今でも普通には、春日山は全部山城だと見ているわけですが、違う考え方が出てきたら、それを検証しないといけないと思います。

私も、春日山は全国屈指の城だと思いますが、それでは何が屈指か。山のてっぺんから裾野まで、平坦になっている部分、つまり館が続いていることです。普通の山城ではあり得ないです。

その一つの解決法が、お話の米沢城にある。米沢城二の丸にある二十一の寺院のうちの幾つかがどうも春日山にあった。「上杉御年譜」にも〈春日山北の丸大乗寺〉が出てきます。それではどこにあったのか？

山城としての春日山を考える時代は、ある意味終わっていると思います。

もう一つは、これも先生が「春日山を考えるときに一番大事なのは景勝だ」と強調されました。シンポジウム以来十年間、そのことを考えてきて、山城が裾野とつながってしまっ



安土城　本丸まで石段と石垣が続く



御屋敷のたたずまい
愛宕谷公園から行くことができる

お花畑



たのは、景勝の時代にお寺を設けたからにほかならないということです。

――それが、両先生がおっしゃる〈景勝の二十年〉ですね。

小島　そうですね。景勝がいた二十年間に…。

川村　米沢にある膨大な上杉家の文化財、国宝が春日山にあったわけです。

小島　すごい量でしょう。

川村　では春日山のどういう施設にあったのでしょうか。軍事施設としての山城には必要ないでしょうね。

――軍事施設には毘沙門堂も諏訪堂もお花畑も不識院もあり得ない。

小島　そうですね。

川村　文化施設と役所、軍事施設の三つの機能を持っていたとしたら、江戸時代の城とはもちろん、中世の山城と考えても全然違うイメージですね。

小島　イメージ違いますよ。多少似ているといえば安土城くらいだと思います。春日山を考えるとき、大乗寺以下のお寺をちゃんと位置づけて、単なる山城ではなくて〈こういうものだった〉という検証をしなければならないと思います。

――そうすると、謙信公のお屋敷だったという、〈御屋敷跡〉はちょっと無理がでてくるわけですか。

小島　御屋敷から、段々になって上がっていく平らなところが、元禄時代に始まる城絵図から変わっている。駄目になる。そういう絵図を見て御屋敷、蔵屋敷という発想をしているうちは無理だと思います。

私は〈御屋敷〉から上は、直江屋敷まで寺院だと、今は思っています。

春日山城跡を守る力

――少し話題を変えますが、春日山城跡は民間の手で保存されますね。

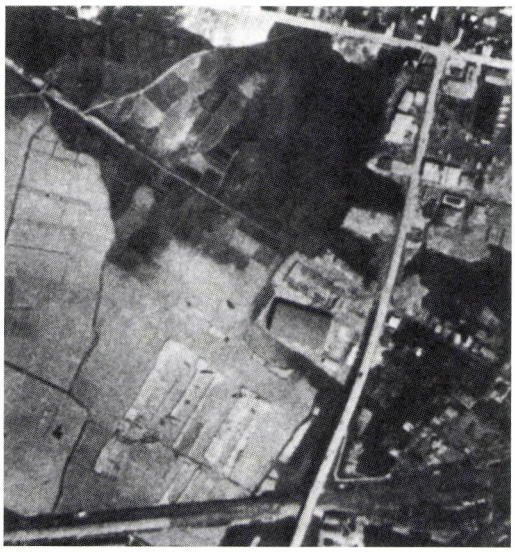
小島　大正九年、春日山史跡保存会という財団法人ができます。この土地は上越市の教育長をされた故田中正先生のお宅がお持ちになっていて、それを樋場の加藤さんが買われ、ちょうど中頸城郡の町村会に保存の計画があり、安く提供して下さったと聞いています。

――やはり謙信公の居城を大切にしようということですね。

小島　謙信公が軍神として崇められる時代が



平泉寺への石段と楠正成の墓所



上空から見た御館跡
上下に伸びる白い線は上越大通り、中央下が御館跡
カマボコ形の屋根は現在パチンコ店シルクロード

ある。春日山神社の碑は東郷平八郎元帥の揮毫です。軍事大国になっていく過程で、そういう評価が高まって、史跡指定に結びついていくわけです。昭和十年八月二十七日です。その前年に指定されたのが、群馬県の太田金山城という山城です。なぜ指定されたかというと頂上に新田義貞の新田神社がある。一緒に指定された七尾城は、謙信公が歌を詠んだという理由です。城としての評価ではない。

川村　幕末の国学思想、尊皇攘夷のなかで、上杉謙信公だけが徹底的に勤皇ですから注目されました。

小島　徹底していますね。春日山の絵図も幕末から立派になってきます。今、よく出回っているのは幕末に書かれている。最後に描かれたのは、明治天皇の北陸行幸でご覧頂いただいたものですから、とんでもない立派になっちゃう。誤解されると困りますが、謙信公の評価の高まりは軍国主義と不可分ですね。その前に、ちゃんと尊王思想があって、そのなかの戦国時代の代表選手が上杉謙信。それが史跡指定にまで全部一貫してつながっていくわけです。

御館・福島城跡を守る力

――春日山から御館へ向かいます。昭和三十九年、宅地造成による緊急発掘というのは、日本のさきがけみたいなものですね。

小島　ちょうどオリンピックの年で、発掘などまずなかった時代だと思います。ほんの一部の大学の先生や地域でほんとに〈土器好き〉という人くらいですから、珍しいなんてものではない。もっと珍しいのは公園にして残したことです。

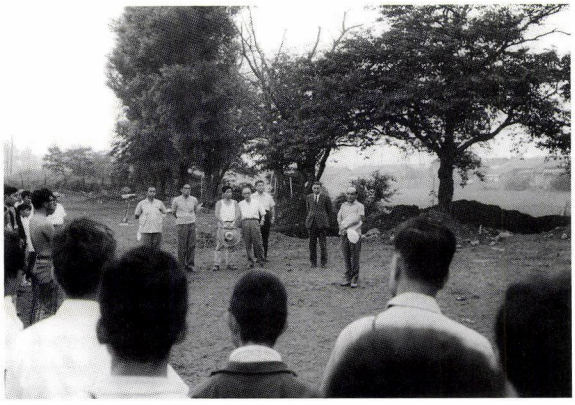
――そういうことが、財団法人を作って守ろうということに結びついてくるわけですね。

小島　そういう国家体制の問題とは、表と裏の関係でしょうね。白山の平泉寺も平泉寺を指定しているわけではなく、楠木正成の墓があることが指定の理由です。春日山と同じ日に指定されている。最後になって明治天皇行幸碑なども「史跡名勝天然記念物保存法」で指定されていきます。

――短絡的な指定の事情があったとしても、結果的として春日山が守られ、私たちが今そこに立って考えることができる。

小島　動機はともかく……。敗戦で、GHQが明治天皇行幸碑は全部指定解除します。幸いなことに城や神社仏閣は指定解除されなかった。GHQが指定解除していたら今まずないでしょうね。

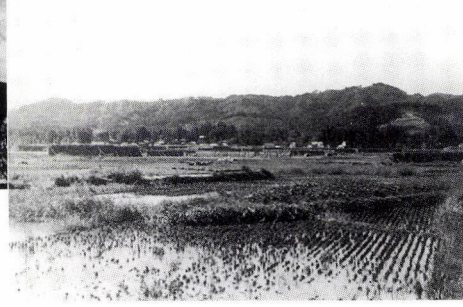
＊福島城の発掘については本誌25号をご覧ください
＊老人ホームの造成中に多くの密教法具が出土した



福島城の発掘初日の挨拶



北塚の発掘



手前の田んぼ先が御館跡
山並みの左端が春日山

――夏休みに中学生から大学生まで、今で言うボランティアで発掘作業がおこなわれた。その間に発掘成果の説明会をやって、なおかつ公園にして残すという〈地域の力〉のようなものが春日山の保存の時代からずっと昭和四十年位まであったのではないかと思います。

川村　国分寺の裏の北塚は。

小島　昭和二十五年ですね。

――直江津北塚研究会を組織して、東大の駒井という先生が指導しています。五智*の老人ホームは三十六年です。あれは造成中に遺物が発見され、平野団三先生が調査されたもので、いわゆる学術調査ではないと思います。

小島　そのあたりは、あまり記録されていません。御館、福島はきちんと記録が残っています。

川村　以上のことを〈地域力〉ということで考えるなら、中学生や高校生までが関わっている。これは当時の社会科が優れていて、昨今の総合学習の分野で、社会科らしい社会科をやっていたということです。当時の公孫会のレベルの高さ、それから地域史・郷土史という研究のレベルの高さを物語っている話ですね。そのことが一番大切だということです。

小島　そうですね。

――御館発掘の勢いそのままで福島城を発掘しているようですね。膨大な写真が残っています。ほとんど高校生くらいですが、中には佐賀県立九州陶磁文化館館長の大橋康二さんも、学習院大の学生として参加しています

川村　地元ではどんな人がいますか。

小島　新大の中村辛一、渡辺慶一、青山正久、中沢肇の先生方、古川渉商工会議所専務。指導が福島城主堀氏の直系奥田直栄（なおしげ）先生です。

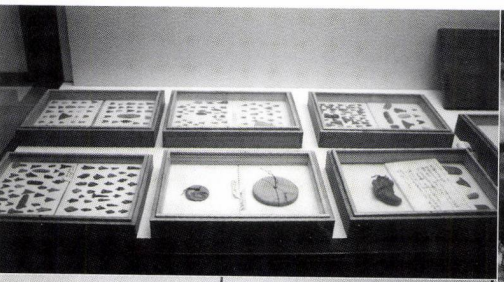
――当時の直江津市長が佐藤策次先生、教育長が深沢一雄先生、お二人とも地域の教育界のみならず、市民に大きな影響を及ぼした方です。発掘初日の挨拶の写真に皆さん写っています。

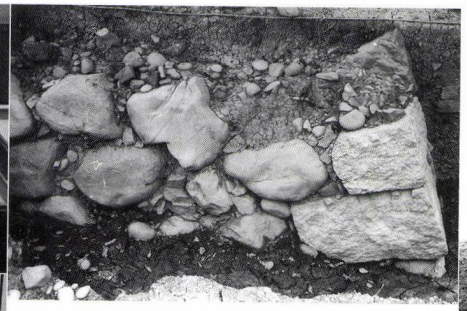
川村　地域力とか総合学習がそれほど目新しいことではなく、社会科こそという感じがしますね。たぶん戦後の社会科の出発点ではないかと思います。地方におけるもっとも良い例だったのではないでしょうか。

話が飛びますが、近在に神童と呼ばれるような子どもがいると、地主さんたちが奨学金を与えて東京の大学へ出させる。

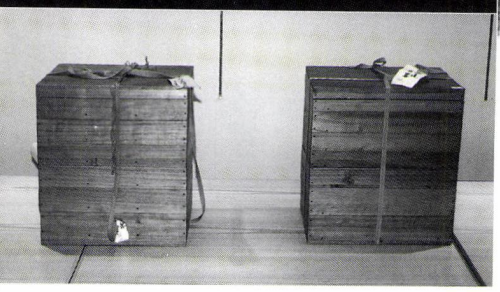
――岩の原葡萄園の川上善兵衛さん、頸城自動車の創業者山田さんもお金を出した。

川村　私が教わった社会科では、地主は悪の権化です。しかし実際には、地元の地主は自由民権運動や民主主義を進めることに最も力を注いだ人たちです。それが当時としては地域の力だった。その地域の力が、じつは戦後の社会も作っていく、しかし、それが今どこへいってしまったのでしょう。





出土した石垣の一部



桐の箱に収められた森成コレクション（上越市埋蔵文化財センター企画展より）

炎天下での発掘作業



――「森成コレクション」という考古学資料があります。しかし森成麟造は、夏目漱石の胃腸病を治したとか、坊っちゃんと笹飴の関係くらいしか話が残っていない。上越郷土研究会の「頸城文化」を創刊した人でもある。たぶん、ほとんど私費で……。

小島　あの頃のいわゆる考古学好きという人たちは、今の人たちが絶対真似できない几帳面さをもって、収集したもの全部を記録している。出色の資料です。

頸城郡で出土したと伝えられているクリス型石剣はすばらしいものです。専門的になるので簡単にしますが、山麓線の吹上遺跡、新幹線駅前の釜蓋遺跡が弥生時代中期から古墳時代の初期まで半径一・五キロの中に七〇〇年くらい続くわけです。

それがクリス型石剣の出土地に対する疑問〈頸城で出土するはずがない〉という先入観と関ってきて、改めて関川を中心とする高田平野という空間を見直さなければならなくなってくるわけです。つまり、森成コレクションがあったおかげで、考えることができるわけです。

――「頸城文化」は。

小島　年刊でも大変なことですが、続けてもらったおかげで、種々な史料がのこされたわけです。

師団長官舎保存は地域文化の再発見

――いま理解するところでは、師団長官舎は市民運動によって残された。

川村　直江津の駅前には「いかや」がある、高田の本町六丁目には「高田館」がある、城跡には「偕行社」がある。これらの明治の建物が、上越市が誕生した時になくなってしまった。高田市役所も。明治・大正・昭和の建物が次々と消えていく、古い雁木が消えていった。あとは師団長官舎を残すしかない。

それは単に残すというより、何をこの地域の目玉において新しい文化を作って行くかという問題でもあったわけです。

後でもう一度お話しますが、ずっと東京へ地域の力を一方的に供出していくなかで、地域では何を作ったか、失われていく一方だった。それに何とか歯止めをかけて、地域にいい物を見つけていこうということです。

師団長官舎を残す。焼けてしまった五智国分寺に関しては研究をする。春日山を百年前にもどす。新しいものを作るより、この地域の最も特徴的なものをともかく再発見していきましょうという運動の一番最初だったかもしれません。



直江津駅前の象徴だった「いかやの三重の塔」


移転保存された師団長官舎

小島　残さなかったという点では、別な側面もあるかもしれない。〈そこそこ〉という言葉が当っているかどうか分からないですが、豊かなまちだと思います。高田にしても直江津にしても。だから何を無くしたかということに気づくような生活をしていないのだと思います。伝統的建造物だとか重要文化財などに指定されているもののほとんどが、特殊な事情、ある意味忘れ去られていった町や村がどうしようもなくて残ってしまった、というのが多い。この町の人たちは、前を見て行くことのほうがよほど自分たちの生き様に合っていたのではないかなと思う。それにしても何にもない。高田市役所にいたっては、残っていれば重要文化財です。

――官舎の保存が、その後市民運動として定着したか…。

川村　私にとっては文化再発見、文化運動です。

小島　そうですね。

川村　文化運動として定着して欲しかった。

――先ほどの、東京への地域力の供給とは。

川村　第一次高度成長のときは地域力があったからだと思いますが、第二次高度成長のときは日本の社会自体が、首都圏、東京中心の大変革だった。その大変革を担ったのは、じつは地方の人材です。明治維新と同じように、第二次高度成長を支えたのは地方の人材だった。その人材を一方的に供給していたのは地方都市だった。

上越後（かみえちご）のかたち

――唐突ですが、最後にお二人にとってのこの土地の〈心の景色〉は…。

川村　金谷山から春日山、そして五智の山、後ろには岩殿山、湯殿山、その奥に薬師山がある。そして里山、高地性集落あるいは食生活の基盤があって、文化の基盤がある。そこにいろんな文化が凝縮され、かつそれが失われながらもかつ残り、そこが私にとっては研究する原点であり、同時に癒しがある。ここだけは後世に絶対残しておきたいところがある。〈海と山との接点〉だということです。

小島　川村先生の最後の言葉がすべてですね。目の前が海で振り向けば山という、空間という存在感がないところで育ちましたが、ここへきた時にやはり違うんだと思いました。

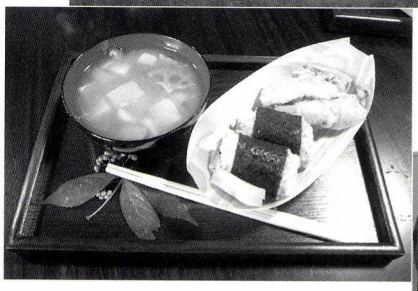
海と山との接点っていうフレーズをどのようにこの地域の人が認識しているか。考古学の感覚で見たら、海がなければこの土地にほんとうの文化が根付いてこないと思っていま



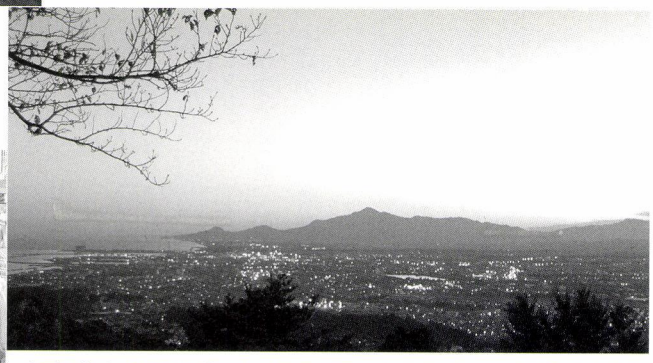
穏やかな景観を作り出す頸城平野の西側の山並み

仏教の須弥山（しゅみせん）を表す妙高山





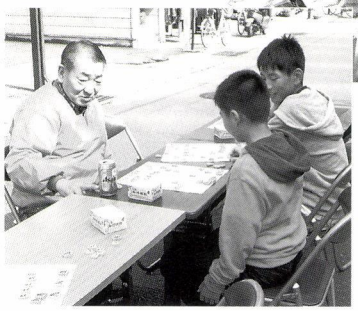




加賀白山の開祖泰澄大師の伝説を伝える米山薬師の黎明

人々の豊かな日々の営み





す。中部高地という表現が適切かどうかは別にして、たとえば長野がなければここの土地の良いところも悪いところも出てこない。

ある程度山に入ったところから文化の需要が始まっている、というのもうなずけるわけです。少なくとも海だけでは生きていない。直江津に港がありますが、山がなければ海の必然性はない。阿賀野川がそうであるように。姫川も山に囲まれている。松本の鰤文化なども。そういうことをもっと考えたほうがいい。海に目を向けたら、妙高山も見て欲しいということだと思うのです。

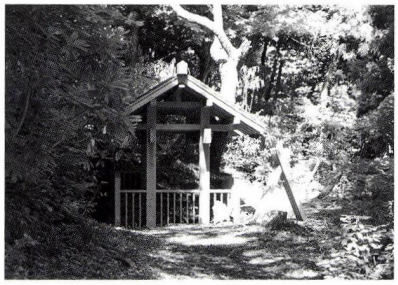
川村　〈海と山の接点〉は、外へ出てみればすぐ気がつきます。

――あまりにも見慣れた風景だから気がつかないのであって、外へ出てみて、もう一度自らの地にもどり、歴史に学んで明日の鏡にするということでしょうか。長時間ありがとうございました。

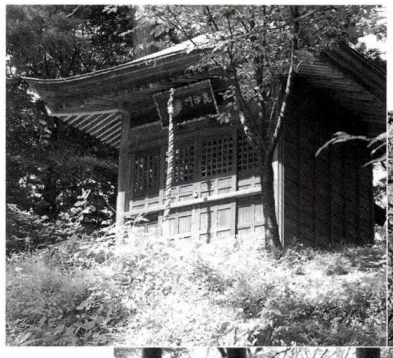
天を歩く 地を人を

越後に住んで謙信公を知らない人はいないでしょう。謙信公の跡目を争った「御館の乱」を知っている人も多いはずです。しかし上越でも、二十年間越後の支配者であった景勝公や直江兼続を知る人はあまりいません。その直江兼続がＮＨＫ大河ドラマの主人公。景勝・兼継の二人が三郎景虎と争って越後を統治することになる「御館の乱」の舞台を少し歩いてみました。

茶臼山城（頸城区）大井戸
城主の姫が三郎景虎の悲運を嘆いて身を投げたという

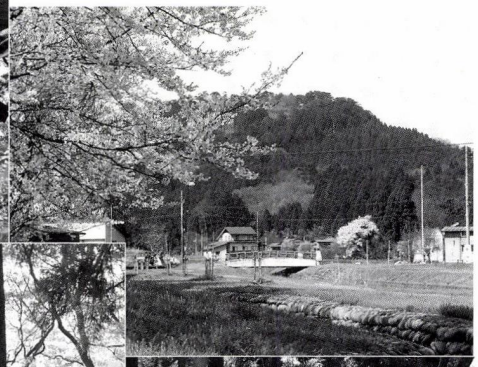


春日山城をめぐる



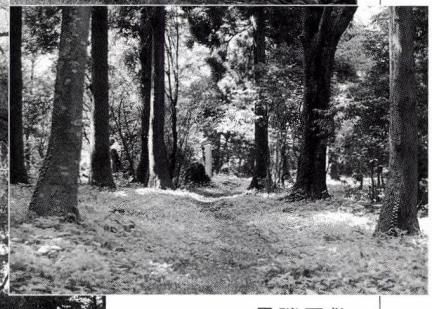
毘沙門堂

春日山城





三郎景虎屋敷

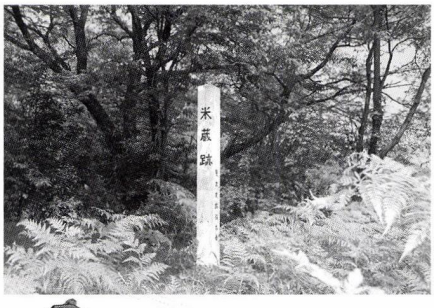


景勝屋敷



直江屋敷

鮫ヶ尾城（妙高市）米蔵
今も焼け焦げた米が見える



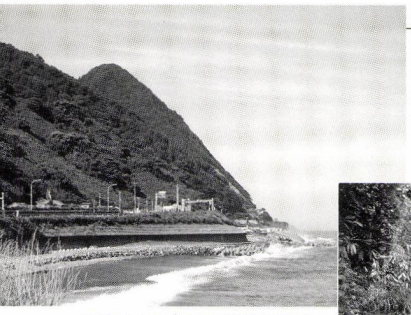


御館
発掘後は公園になっている

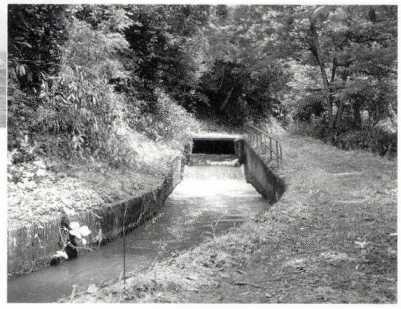
直江氏の出自　「直江津町史」は、上杉景勝の近習樋口与六が継いだ直江家の発祥の地は「直江の津」であると、直江家の家譜をひいて、「直江氏の祖は藤原氏で、越後国司として津ノ郷に居り、後に土着して豪族となり水門の経営の傍ら、津村荘と直江ノ荘を経営するところとなり、直江氏を名乗る」ことになったと伝えている。そして守護大名上杉氏の重臣となったという。

愛

越後統治の20年



天正13年に豊臣秀吉が石田三成を伴って勝山城に赴き、景勝・兼続主従と対面したと伝えられる（糸魚川市・青海）



景勝・兼続主従が開発を始めたと伝えられる用水の流れ（上江用水・板倉区）



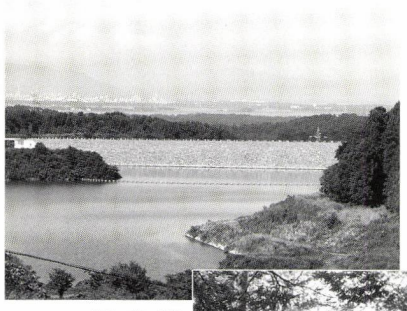
直峰城（安塚区）
上杉軍の関東への道を監視する



御館の乱後、兼続の実父樋口兼豊が守った

本丸直下の空堀

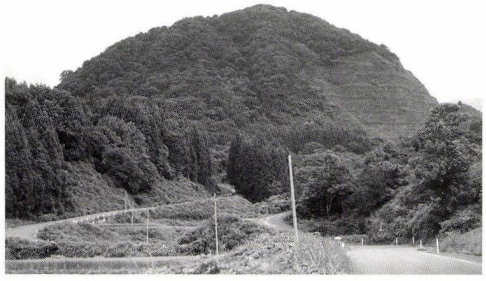
猿毛城周辺



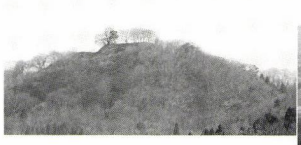
珍しいロックフィルの柿崎川ダム



謙信の学問の師天室光育が招かれた名刹
楞厳寺



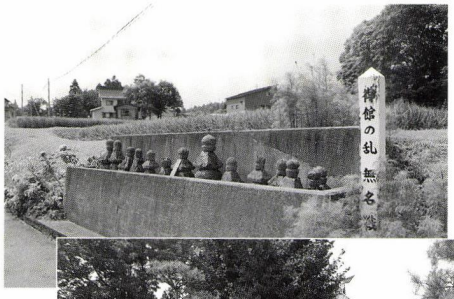
猿毛城（柿崎区）
景虎方に付いたため景勝軍にいち早く攻められた





蓑冠城（板倉区）
頸城平野全体を展望できる

御館の乱



御館の乱無名戦死者の墓
（妙高市・旧北国街道）

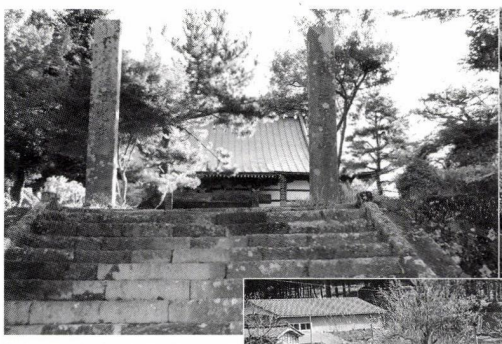


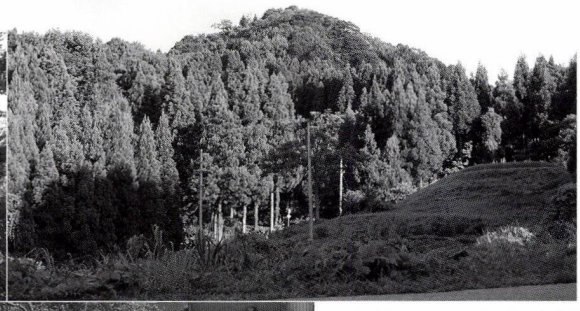


三郎景虎が自刃した勝福寺（妙高市宮内）

天・地・人

不動山城



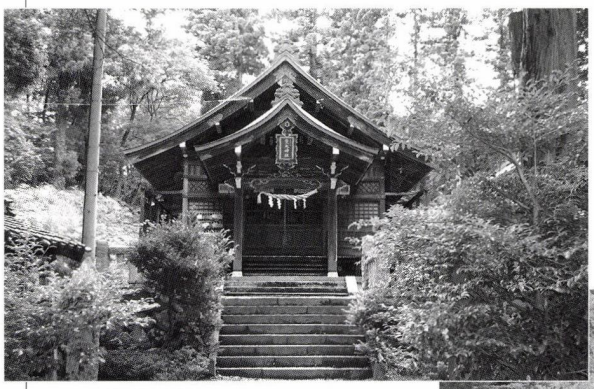


不動山城と早川をはさんで対面する位置に日光寺がある
毎年４月には白山神社と神仏習合の祭り「けんかまつり」が行われる

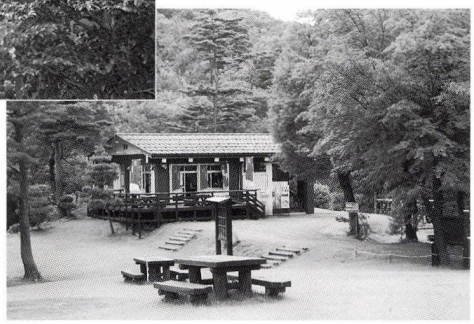


上杉謙信の有力武将の城であったが、景虎方に付き、景勝軍に井戸を占領されて落城
（糸魚川市・早川谷）

鮫ヶ尾城周辺

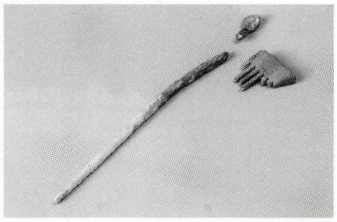


斐太神社
平安初期の創建で「式内社」に列せられている

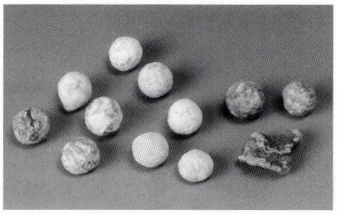


鮫ヶ尾城への入り口の管理等には鮫ヶ尾城出土の「握り飯」が展示されている

御館の乱のあと
御館出土品



櫛とかんざし



鉛の銃弾
（潰れているのは使用されたもの）

（上越市教育委員会）

文学の旅

為広越後下向日記

令泉為広卿　京兆細川政元
越後府中の饗宴



公家屋敷として唯一残る冷泉家（国重文）
後方の建物は同志社大学

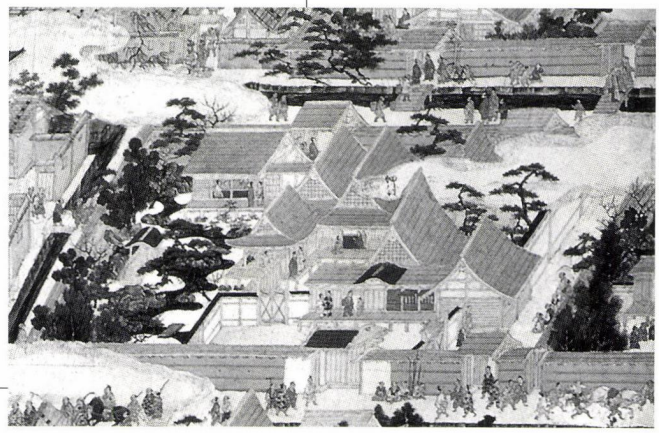
延徳三年（一四九一）三月三日、歌人冷泉為広卿と室町幕府の管領細川政元が京を発ち越後府中へと向った。

旅人の一人、冷泉為広は、現在京都に唯一残る公家屋敷と膨大な古典籍を有する時雨亭文庫を守る冷泉家の六代の人である。為広卿は権大納言であるとともに歌人であり、足利幕府十一代将軍足利義澄によって堂上和歌師範となったが、義澄の失脚に殉じて出家する。

右京大夫細川政元の細川家は、室町幕府の管領職を預かる三管領家の一つである。政元の父勝元は応仁の乱を引き起してそのさなかに没すると、政元は八歳で家督を相続、政敵を倒して管領職を独占して室町幕府の実権を掌握する。代々、右京大夫に任ぜられて、唐名である京兆（けいちょう）あるいは京兆家と呼ばれている。

政元はまた修験道にはまり込み、魔法飯綱の法、愛宕の法を行って、さながら山伏のようであり、見た人は「身の毛もよだつようだった」と、当時の日記などに記録されている。修験者であるため妻帯せず三人の養子を迎え、結局、家督相続争いに巻き込まれて暗殺されてしまう。

京都の細川邸　上杉本「洛中洛外図屏風」にひときわ大きく描かれている（上杉遺宝展図録より）



このような〈現職の高官〉の二人旅のようす――当然多くの従者をつれての旅であるが――は、為広卿が記した「越後下向日記」として残されている。しかし具体的な旅の目的は書かれていない。

京都相国寺の塔頭、蔭涼軒の公用日記「蔭涼軒日録」に「細川政元、奥州の牧場を見んと欲し、越後に到る、（上杉）房定、帰洛を勧む」と記録されていて、四月二十八日には、新馬一三〇頭を引いて都に帰り、「これを見る者、堵墻（としょう）（かきね）の如し」とも書かれてい

る。また興福寺大乗院門跡の「大乗院寺社雑事記」にも、政元が帰京し「馬数百疋、この間、連日到来」と記されているので、馬を買い付けに行ったのであろうか。

ともあれ、旅は近江、越前、加賀、越中の各所でもてなしを受けながら、三月十七日、糸魚川の観音寺に入ると、越後府中から上杉家の使者が出迎えに来ていた。翌十八日は雨の中を能生の金剛院へ。十九日は晴天、十時出立。名立の「タカ原ト云う者」の宿で昼食、有間川の船橋を渡って、いよいよ越後府中へ入り、至徳寺の長松院に到着。わざわざ「今日風呂アリ」とあるので、風呂はご馳走だったのであろう。

やはり馬が目的だったようで、二十日余りの滞在中に連日、馬が引き出されて政元が閲覧している。

また、毎日のように酒宴や歌会があり、金品の贈答が行われている。

上杉房定・房能父子からは二人へそれぞれ、越後布二十反、太刀、銭、馬が贈られ、返礼として盆、紵子（繻子・朱子織物）、唐錦、太刀などが返されている。

日記の中で目を惹くのは、よほどの力がないとできない〈三献〉という正餐が行われていることである。道中、一乗朝倉氏以外には越後府中だけである。また武家修練の必須である〈笠懸〉や〈犬追物〉が行われている。ことに犬追物は一辺一六〇m四方の垣根を巡らし、総勢三六騎の射手で一五〇頭の犬を射る（射殺すわけではない）競技である。こんな競技場はどこにあったのであろうか。

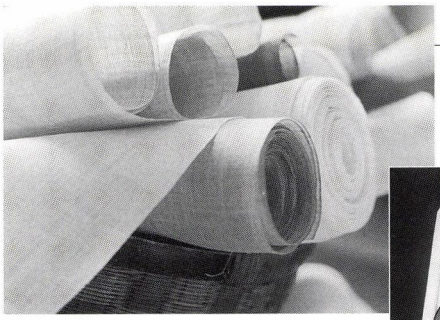
この間、為広卿は柏崎へ赴き一泊、帰りに柿崎で一泊している。このとき〈アフゲ河船橋　渡〉と書かれていて、応化の橋を渡ったことが分かる。当時は船橋であった。また柿崎では、海のむこうに佐渡の山の雪も望むことが出来たと書き残している。

月が変わって、四月二日は山本圓通寺の観音、五智如来などに参詣している。

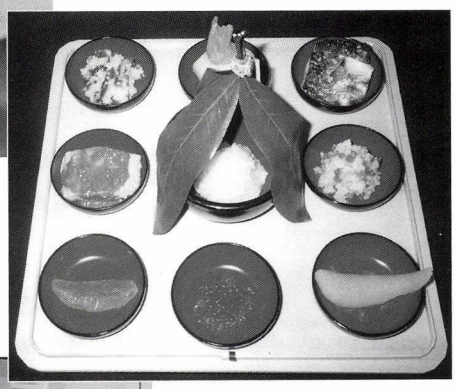
十日ようやく帰洛の途に付き能生に一泊。能生からは舟を乗り継いで放生津（射水市）から陸路都へと向った。

為広卿は永正十五年（一五一八）にも越後府中を訪れている。

＊資料・参考　冷泉為広卿の「越後下向日記」と越後の旅路・小葉田淳／環日本海地域比較史研究2・矢田俊文／越佐史料



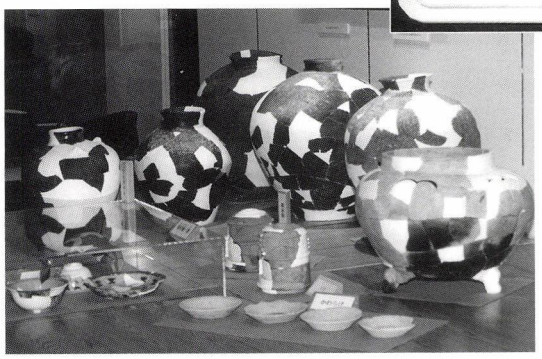
「ゑちご」といえば越後布を指し夏の礼服に指定されていた



饗宴の膳



式三献の図
（群書類従より）



直江津駅南の通称「至徳寺」一帯から大きな遺構が発見され室町時代の守護所と推定されている　至徳寺と合わせて越後守護上杉氏の饗宴の場であった（上越市埋文センター）

休刊のお知らせ

〈バックナンバーから〉

わずか八年、三十二冊でしたが、ご愛読ありがとうございました。

上越なおえつ信金倶楽部

第一巻一号　平成十三年　春号
福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する
掘ったら何が見えるか直江津　中世都市・越後府中・直江の津
水族館になにを見るか

第一巻二号　平成十三年　夏号
巻頭エッセイ　世界の果て　杉みき子
湊町から臨海工業都市へ　直江津の産業史
人々のくらしに息づく「祇園祭」……囃子の伝承を通しての一考察
妙高山　現在・過去・未来

第一巻三号　平成十三年　秋号
巻頭エッセイ　分岐点　吉越泰雄
フォッサ・マグナを境にした東西の日本文化と南北の国土軸
「緑の島」の物語るもの

第一巻四号　平成十三年　冬号
巻頭エッセイ　安寿恋しや　馬場和明
古老が語った直江津の昔
世界一の山脈　関田山脈

第二巻一号　通巻五号　平成十四年　春号
巻頭エッセイ「ゴチ……？」米山康久
イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン
能生白山神社　春の大祭と舞楽

第二巻二号　通巻六号　平成十四年　夏号
巻頭エッセイ　２００２年☆直江津の旅？
魚家明子
米山をめぐる民族文化
報道のなかの祇園祭
雪国の固有と呼ばれる植物

第二巻三号　通巻七号　平成十四年　秋号
巻頭エッセイ　銀河鉄道駅零時発　関由有子
直江津　五智遊覧の旅
甲信越のみなと　直江津の再生
岩の原ワインの楽しみ

第二巻四号　通巻八号　平成十四年　冬号
巻頭エッセイ　直江津恐怖体験　藤田英明
西横山 小正月行事
直江津・五智十二景
健康老化は人類の夢？

第三巻一号　通巻九号　平成十五年　春号
巻頭エッセイ　なぜか、直江津　森　子朗
海の恵み　高田のまちに見える海の印象
日本一のカラスのまち

第三巻二号　通巻十号　平成十五年　夏号
巻頭エッセイ　マニキュア　佐藤光子
人が支える「頸城」の大地
たのしい　おいしい　考古学

第三巻三号　通巻十一号　平成十五年　秋号
巻頭エッセイ　夕陽と酒　田中孝司
「鉄道唱歌」の旅人
海の総合的試験研究機関と共に歩んで

第三巻四号　通巻十二号　平成十五年　冬号
巻頭エッセイ　晶子に至る　柳家小満ん
働くまち　手しごとのひと
南極越冬で考えたこと　南極は環境を学ぶ教室
平成十六年三月　春号　休刊

第四巻一号　通巻十三号　平成十六年　夏号
巻頭エッセイ　グァンバレ、駅前商店街　橋本秋子
「空洞化」を乗り切る上越地域の工業的発展
新しい時代の地域づくりに向けて　上越地域の活性化への取り組み

第四巻二号　通巻十四号　平成十六年　秋号
巻頭エッセイ　何処へ、行くんだった？　ひぐちきみよ
「川」の恵み
母なる川、関川の再生を

第四巻三号　通巻十五号　平成十六年　特別号
変貌するまち

第四巻四号　通巻十六号　平成十六年　冬号
巻頭エッセイ　海の響き　小島幸雄
福永家文書に見る「直江津」のまちのかたち

第五巻一号　通巻十七号　平成十七年　春号
巻頭エッセイ　被災地で見えてきたこと　寺島義雄
「高田」のまちにこめた祈り
「地震」

第五巻二号　通巻十八号　平成十七年　夏号
巻頭エッセイ　虫生へ帰る　中戸正子
上越の園芸作物

第五巻三号　通巻十九号　平成十七年　秋号
巻頭エッセイ　良寛さんのように　伊倉　潔
景観文学紀行

第五巻四号　通巻二十号　平成十七年　冬号
巻頭エッセイ　上流から下流へ　下流から上流へ　富永幸司
横道歴史散歩

第六巻一号　通巻二十一号　平成十八年　春号
巻頭エッセイ　見知らぬ町が原点に　河村一美
上越(かみえちご)後で子どもたちの食を考える　学校現場での実践から
親鸞の風景1　松野純孝

第六巻二号　通巻二十二号　平成十八年　夏号
巻頭エッセイ　あたりまえの風景　草間敬子
未来への卵　新しいクニのかたち
小川未明と春日山　人は夢によって生かされる
親鸞の風景2　松野純孝

第六巻三号　通巻二十三号　平成十八年　秋号
巻頭エッセイ　ゆきのまち、上越　内藤　宏
13区まちむらの唄から覗いて見れば
レプリカは「ニセモノ」か？
親鸞の風景3　松野純孝

第六巻四号　通巻二十四号　平成十八年　冬号
巻頭エッセイ　もののけはい　岸田國昭
新潟県鉄道発祥の地記念　120年前の鉄道
金谷山グラフィティー　思い出のジャンプ台
親鸞の風景4　松野純孝

第七巻一号　通巻二十五号　平成十九年　春号
巻頭エッセイ　直江津の浜風　江塚友之
「古城(ふるしろ)」築城400年　越後福島城を行く
親鸞の風景5　松野純孝

第七巻二号　通巻二十六号　平成十九年　夏号
巻頭エッセイ　春日山との暮らし方　丸山永美子
信越トレイル・梨平峠道

第七巻三号　通巻二十七号　平成十九年　秋号
巻頭エッセイ　失われゆくものへの愛惜　成島継紀
小木航路　歴史編
親鸞の風景6　松野純孝

第七巻四号　通巻二十八号　平成十九年　冬号
巻頭エッセイ　直江津ことば　松川ケイ子
桑取谷から見えてくる農業とは　安全安心な農作物の供給のために環境に優しい農業を求めて　上越市における東京農大の取り組み
親鸞の風景7　松野純孝

第八巻一号　通巻二十九号　平成二十年　春号
巻頭エッセイ　いのち明滅する町　高田　荒川　毅
シリーズ上越(かみえちご)後のかたち「上越学」への試み
【国都】を探せ　謎の越後国府
小木航路　旅情編　残響の島佐渡へ

第八巻二号　通巻三十号　平成二十年　夏号
巻頭エッセイ　山も川も海もある。ほどよい町もある。　はぎはらさとこ
シリーズ上越(かみえちご)後のかたち「上越学」への試み
苦悩する港　近代直江津港の変転
小木航路　活用編　船がたがいの想いをつなぐ
思い出の黒井村（上）　松本恵子

第八巻三号　通巻三十一号　平成二十年　秋号
巻頭エッセイ　直江津感傷旅行―母の失恋
杉山百合子
シリーズ上越(かみえちご)後のかたち「上越学」への試み
縄文人が作った頸城の「自然」「自然の構成者」としての未来への責任
思い出の黒井村（下）　松本恵子

■読書びと



図書館のある暮らし

竹内紀吉著

未来社
本体一九〇〇円

わが町に誕生する図書館等の〈整備検討委員〉の高校生のコメントに、「きれいなところだと、受験勉強がはかどりそう。これからいっぱい使ってみようと思います。」とあったと報じられた。無視できないこの根強い図書館観と向き合って、半世紀も前の一九六〇年に、日本図書館協会は事務局長有山崧（ありやまたかし）の肝煎りで、新運営基準作りを開始、「中小都市における公共図書館の運営」というレポートをまとめた。これが日本の図書館の方向を大きく変えた歴史的な報告書となる。

「1．図書館は市民に資料を提供する機関であって、その機能上の基礎は貸出しにある。／2．図書館は一つの建物ではなく、組織、システムである。／3．市町村立図書館、いわゆる中小図書館が公共図書館の中核となるべき。」

その理念を実証すべく、高度成長と市民意識の高揚を背景に、貸出と児童サービスに重点を置いた図書館が次々に誕生した七〇年から八〇年代の時代。モデルケースとなった東京都日野市立図書館の館長前川恒雄の『われらの図書館』（八七年・筑摩書房）や、竹内紀吉（たけうちのりよし）『図書館の街・浦安―新任館長奮戦記』（八五年・未来社）等の記録は、読書の歴史と図書館運営の理想を俯瞰し、実務者としての手腕そのままに見事に纏められた手引書として世に迎えられた。

時を経て、「情報基盤としての図書館」の機能強化が迫られ、自治体経営と公共サービスの狭間で、〈利用者至上主義〉が問われている。いまこそ神格化された成功体験の呪縛を放れ、この先達の仕事を見詰め直す時なのだ。

竹内紀吉は一九四〇年東京に生まれる。働きながら夜間高校、中央大学の二部で学び、国立図書館短大専修科をへて千葉県立中央図書館に勤める。設立時の初代館長として浦安市立図書館に出向、開館までの顛末を書上げた『図書館の街・浦安』で紙価を高め斯界の注目を浴びた。

竹内の真骨頂は、「本の森」と名付けた書庫増設の際智慧を絞り異例に二十万冊分を開架とし、利用者の本との触合いを大切にした優しさと、地味な図書の出版を継続する人文系出版社三十一社の発刊済書籍全点を購入、貸出するという果敢な方針を断行するリーダーシップにある。

後事を託した副館長・菅まゆみが癌に斃れ、竹内が県職を辞し再び館長に返り咲くまでが記される『浦安の図書館と共に』（八九年・未来社）に続き九〇年に上梓されたエッセイ集『図書館のある暮らし』は、三部作の仕上げとして多層的に、現場の日常を舞台に利用者のエピソードを綴り、読書会を積重ねての感想、様々な場での作家との出会いが語られる。数字に振り回される図書館行政の風潮とは無縁の館員達の地道なドキュメントが溢れ、伝説化された図書館のその理念と実像を明らかにする。浦安の盛名を〈御大尽自治体の本道楽〉と揶揄する側の、心貧しさを際立たせる事実の重み。

ジュリアン・グリーンの魅力を的確に語る評論ほか、仏文学を専攻した竹内の肉声が素直に伝わってくるのも嬉しい。デザイナーズチェアのコレクションが趣味（常に市民の側に立った建築家宮脇檀（みやわきまゆみ）を想起する）の竹内らしく、愛嬢の手になる椅子のイラストに彩られる。

竹内紀吉は、市民図書館の第一線を離れ後進育成の場に転じ、構想した小説の夢を天上に持越して二〇〇五年夏、六十五歳で彼岸へ去った。

ほの暗い書庫に漂う匂いの中、ダイジェスト訳ではない世界文学全集や臼井吉見編輯の現代教養全集が並ぶ、往時の直江津中学校図書室を思い出す。佐藤策次校長の学校図書館経営論を体験したわが直江の津の住民は、いまこそ自前の図書館像を語り合い、結ばなければならぬ。

この一冊もヒントにして、海辺の町の図書館を巡る会話に稔り多きことを念じたい。（伸）

2008.11.9

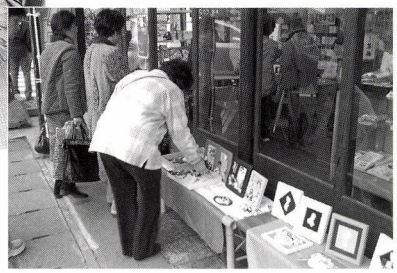
カメラの眼

まちを元気に

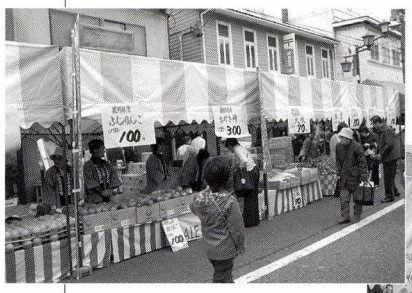
直江津

さかな やさい祭り アート商店街 in直江津

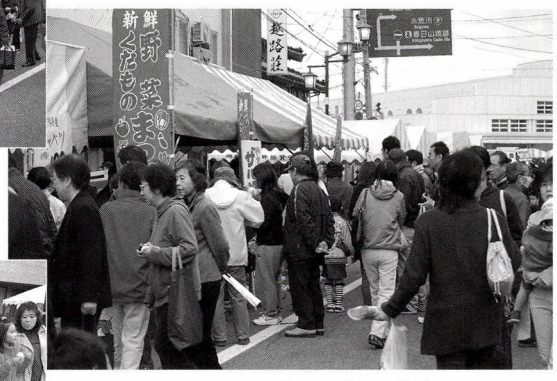




年々参加者が増えるアート商店街



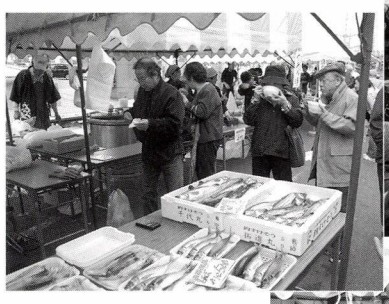
やさい、果物の大安売り

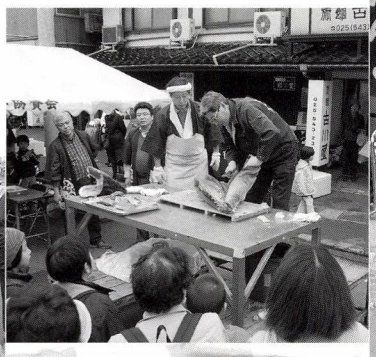


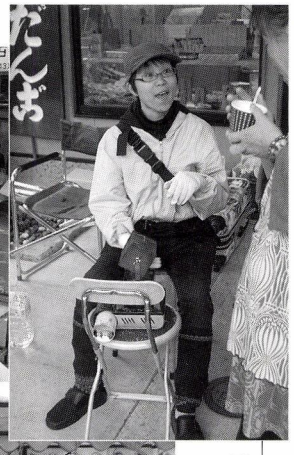
めったに見られない人出



市長さんも





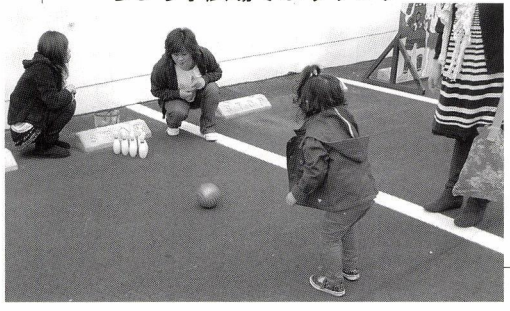


マグロ解体ショー、魚の即売、つみれ汁など盛りだくさんの催し



コーヒー売り

ちびっ子広場でボウリング



仏師と建築家の会話

昭和五十八年（一九八三年）の完成当時、谷村美術館は「新建築」誌の表紙を飾りました。

まだ建築のイロハの時期にあった私は、完成数年後に訪れました。和風の回廊に囲まれた建物は内外とも不思議な形で、初めて見るようでいながら、すでに感得していたかのような空間が広がっていました。しかし、数多くの建築的解説と建築家村野藤吾への賛辞は、すでに語り尽くされていて、私には口を挟む余地はありませんでした。

さて、久しぶりにそこに立つと、建物はそれ自体が仏像の化身でもあるか……、と思いました。すると、その内に秘められている木彫仏は胎内仏でもあるのだろうか。像の上半身が黄金色、腰より下は消墨色、八本の腕を有する《曼珠沙華》は、湾曲する壁面に、か細い影を躍らせています。淡い彩色の魚籃観音は、古代ギリシャの女神に通じる優雅な微笑みが魅力的です。仏像の一体ごとに、それぞれの宇宙が封じこめられているのです。建物が仏身であり、胎内仏の内にはまた何億光年もの世界が蔵されている……。そこは弥勒の来迎に至る入り口かもしれません。



建築家は何を想い、仏師は何を形にとどめたのでしょう。当時すでに九十歳を越えていた二人の会話に、耳を澄ませてみたいものです。

谷村美術館と同じ頃、奈良薬師寺西塔が西岡棟梁のもとで復興され、塔の初層には仏師澤田政廣によって、釈迦八相のうち果相四像が納められました。寺院の仏像と奔放ともいえる谷村美術館の仏様たちとは、やや趣きを異にしても、眼近に拝めば木彫の鑿跡もうっすらと浮かび、彩色に隠れた木の肌合いが伝わりました。

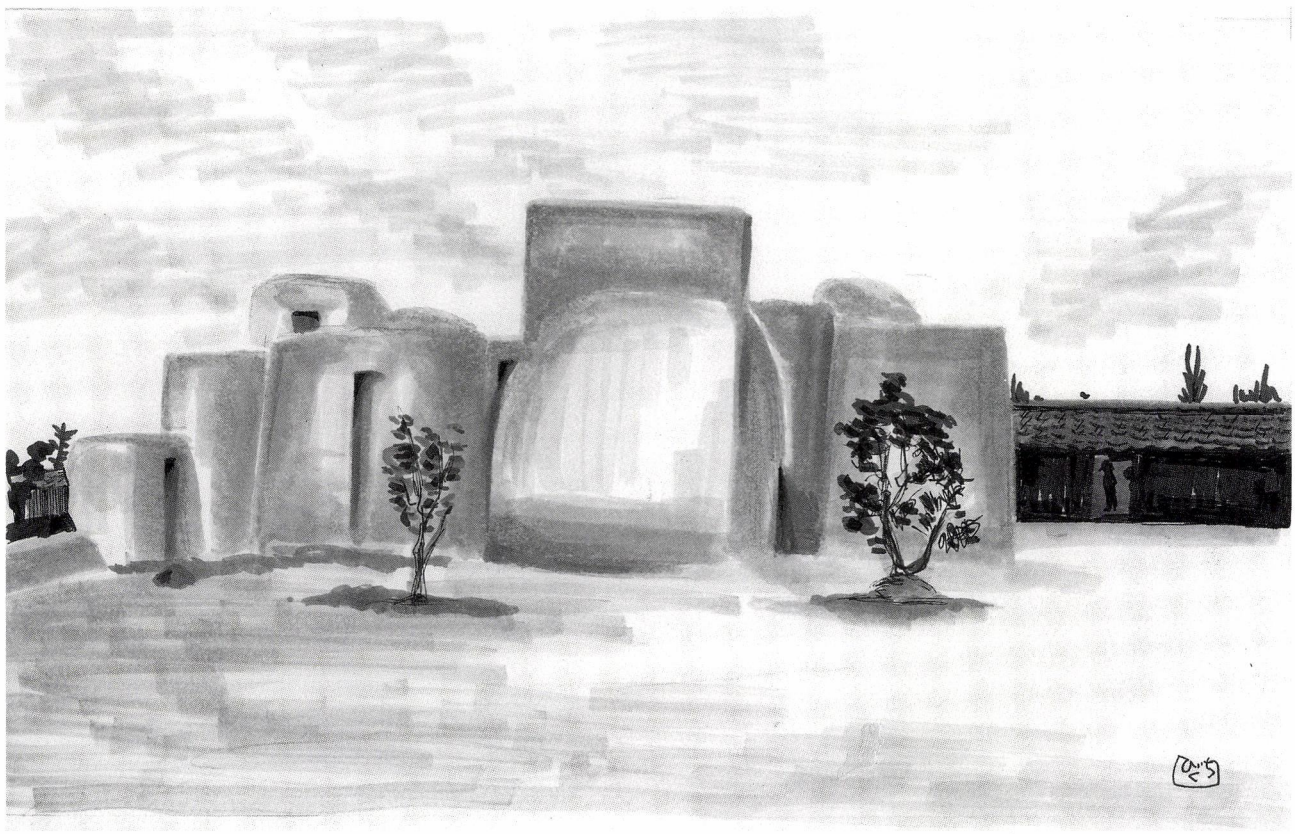
ちょうど閉館間際だったので、照明を消して夕暮れの自然光の中で見学させていただくという幸運に恵まれました。木像の陰影は一層やわらぎ、ざらざらした表情の白い洞窟の壁は、やわらかい夜具となって仏像を包みはじめるようでした。

若い頃、相馬御風との出会いが澤田政廣と糸魚川との縁を結んだという。その作品を納める谷村美術館は、村野藤吾が設計から監理まで現場に立って手がけ、巨匠と呼ばれた老建築家の最後の作品となりました。

訪ねた日、シルクロードを形象したという美術館の前に立つ私たちの背後には、西頸城の山並みに紅葉が始まっていました。

別館のラウンジに工事中の写真や手書きの指示図などの記録が残されています。建設当時のことを知る人が管理されているらしく、現場の様子や仏像の見方を教えてくれました。

■谷村美術館　糸魚川市京ヶ峰
十二月一日から翌年二月二十八日まで休館
■村野藤吾（一八九一－一九八四）
佐賀県唐津市出身。大企業のビル、市庁舎、ホテル、美術館、数寄屋建築と幅広く手がけ、広島の世界平和記念聖堂は戦後の建築物として初めて重要文化財に指定された。
■澤田政廣（一八九四－一九八八）
静岡県熱海市出身。木彫家。熱海に澤田政廣記念美術館がある。



文　せきゆうこ／画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

「使い勝手のよいまち」づくりⅢ

長野新幹線佐久平駅と佐久市に学ぶ

―北陸新幹線上越駅（仮称）開業に向けて―

研究員　佐藤和夫



観光案内所と土産物店が併設されているが、訪れる人は少ない



佐久平駅の改札口で10数年ぶりの再会が

平成九年、長野新幹線佐久平駅は〈長野の東の玄関口〉というキャッチフレーズの下に開業し、駅周辺の商業集積地の誕生は新幹線効果として、駅の開業当初から注目を浴びてきた。しかし最近では「佐久の轍を踏むな」と、評価が逆転するという現象が起きている。新幹線の開業と周辺の商業開発によって中心市街地が衰退したというのである。

◆佐久平駅

長野新幹線佐久平駅は、間隔の短い二つのトンネルの間にあるため高架ではなく、ＪＲ小海線を高架で交差させている。そして当初予定にはなかった小海線佐久平駅が、ホームだけの駅として新設されている。

新幹線の駅舎は旧中込学校をモチーフにしたということであり、出入り口は蓼科口と浅間口があって自由通路で結ばれている。浅間口にはビジネスホテル、マンションが建ち、名前のとおり浅間山を望むことができる。蓼科口側の駅舎は市の施設で、エフエム佐久平や軽食レストラン等があり、ホール中央のからくり時計を見ながら二階に上がると、大きめの土産物店がある。この階からも改札口へ出られるのだが、ほとんどの利用客は自由通路から改札口に向かう。また一日の乗降客も二八〇〇人程度で、観光客らしき人はあまり見られず、土産物店は閑散としている。

◆新幹線をとりまく佐久市の交通

小海線には佐久市の二つの中心市街地岩村田と中込に駅があり、本数は少ないものの新幹線と接続することができる。



佐久平駅　正面玄関蓼科口

この二つの市街地を抜ける国道一四一号線は、中部横断自動車道、新幹線佐久平駅、国道一八号線、上信越自動車道を結ぶ幹線であるため、中部横断自動車道の開通を見越して、渋滞緩和のために臼田野沢バイパスが新設されている。

新幹線効果とは

佐久平駅蓼科口の周辺を見ていくと、臼田野沢バイパス沿線にジャスコなどの大型ショッピングセンターをはじめ、飲食チェーン店、家電店、ホームセンターなどが立ち並んでいて、これらの発展ぶりが「新幹線効果」だと言われてきたのである。

一方で、直線で岩村田から一・五キロ、中込からは五キロの距離にある郊外の新幹線佐久平駅周辺に人が流れ、中心市街地への客が減少してシャッター街の出現を招くことになった。最近、この現象に対して「轍を踏むな」と言うのである。

しかし、よく見るとバイパス沿線に商業集積地が生まれただけであって、直接的には「新幹線効果」ではないことは、すぐに見て取れる。わざわざ新幹線を利用する必要の無い、むしろ関係のないものばかりで、どこにでもある郊外型商業集積地であることが分かる。つまり、中心市街地の衰退はバイパスの開通によるもので、上越市にも、その例を見ることができる。

中心市街地

先にも述べたように、佐久市には二つの中心市街地岩村田と中込があり、その関係を慮ったように市役所や美術館・図書館が、中込地区に近いものの両者の中間に置かれている。そして新たな商業集積地による既存の市街地の空洞化という現象も旧上越市によく似ている。





上　ＪＲ小海線佐久平駅へ通じる通路
　　ホームの向こうにはマンションが見える
右下　新幹線佐久平駅の蓼科口から望む
　　植栽のむこうに大型店やビジネスホテル
　　が見える

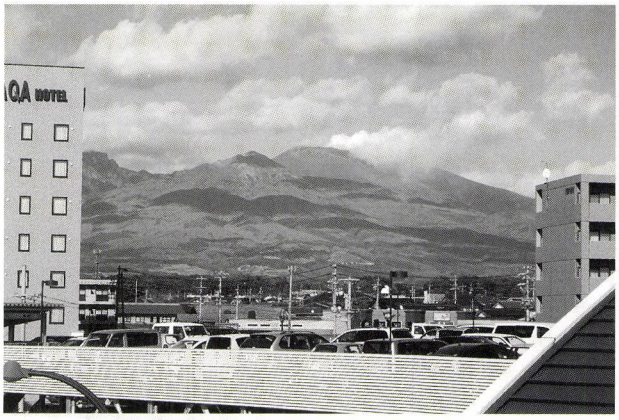


岩村田の商店街を見ると、老舗の酒蔵や和菓子店、中山道の宿場の面影を残す旅館などがあり、よき時代の街並みが続いているが、人通りは少なく空き店舗が多い。

空き店舗への若者の新規参入者を誘致し、立ち寄り施設を作って活性化を図り、またＴＭＯなどを模索しているが、実情は大変厳しいようである。

佐久市に学ぶ

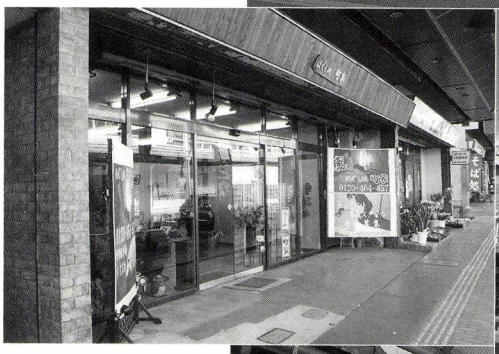
以上のように、わが上越は新幹線の立地や中心市街地のありようなど、佐久市から学ぶ



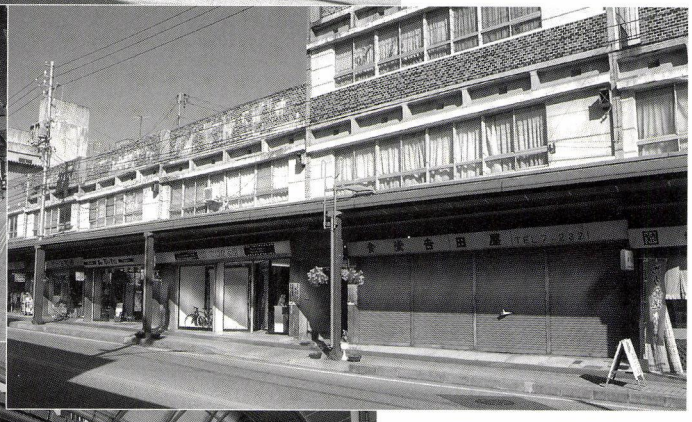
浅間口からはマンションやビジネスホテルの間に浅間山が望める



岩村田のメインストリートに店を構える老舗の酒蔵



空き店舗を若者の新規参入者に貸し出している



閑散とした商店街



空き店舗を利用した、まち興しの立ち寄りどころ「おいでなん処」

べきものが大変多いことに気づく。

また面白い（？）ことに、新幹線の新駅は在来線に併設ではないため、駅名について綱引きがあった。新幹線駅を誘致しなかった小諸が「小諸佐久」または「佐久小諸」を主張し、佐久市は当然「佐久」を主張して譲らなかった。ついに駅名は長野県知事の裁定にゆだねられることになった。

さすがは長野県、県民歌「信濃の国」の歌詞「松本、伊那、佐久、善光寺、四つの平は肥沃の地」を引いて「佐久平」に決められたというのだ。

よけいなことながら、私たちはこのような、誰もがうなずく上越市民としての共通のアイデンティティーを持ちえているだろうか。

さて、北陸新幹線開業まで、あとわずか六年、私たちは上越の新駅の名前も、駅周辺の開発、並行在来線の行方も具体的なことは何も知らせられていないままである。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

本号は期せずして「巻頭エッセイ」「読書びと」と〈地域の力〉がひとつのテーマになっている。

対談は「上越後のかたち」シリーズの最後に行う予定であったが、急遽お願いしたため、編集に手間取って発行が遅れてしまった。紙面の都合もあり、対談の三分の一程度しか掲載できなかったことが残念である。

発行母体の都合で、突然、休刊ということになりました。やり残したものが多々ありますが、手探りで始めた小誌に、辛抱強くお付き合いいただき、ありがとうございました。

編集担当・北越出版

季刊「直江の津」冬号
第八巻四号　通巻三十二号
発行日／平成二十年十二月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二―一―八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三―九―五
〒九四三―〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊 直江の津

発行／平成二十年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円（送料一八〇円）